

農 場 の 今 昔

吉 田 保 治

(付属農場主任)

Yasuji YOSHIDA

農場が開設されてから14年、ここに農場の今昔を紹介できる機会を得た事は、何にもまさる喜びであります。農場開設以来、今日まで関係してきた者として、故世耕弘一先生、故酒井真之丞先生始め数多くの方々から、賜った御薫育に対し、衷心より感謝の意を表します。

ふり返りみて農場の歩みは順風満帆であったわけではなく、それこそ逆風に耐えて育てきた誠に波乱に満ちた建設の日々でありました。近代的な農場建設に科学力を応用し、そして農産業の伸展に寄与できる農場を建設するための絶ざる努力でありました。あの時期にこの様な事があり、そしてあの事をこの様に進めたと思ひ出すとき、御指導御協力をいただいた方々の事どもが重なり合って思ひ出されるのであります。

そこで、1. 創設期、2. 建設期、3. 現状の時間的な経過を軸として、その時々的事柄を注記してみたいと存じます。農場に一層の御理解と、倍旧の御支援をいただけるなれば幸いと存ずる次第であります。

§ 1. 創 設 期

第 1 表 農場創設期の概要

年 月	事 項
28. 8	農芸化学研究所を和歌山県湯浅町に開設
30. 1	湯浅町より土地提供をうける
30. 12	農芸化学研究所本館竣工
32. 2	農芸化学研究所生石農場開設
32. 12	農学部設置のため名称を付属農場（湯浅農場、生石農場）と改称する

農芸化学研究所は、故世耕総長の発意で開設されたが、当初は一会社の間借りから始まり、その後、湯浅町の絶大なる御協力により現在地に移転しました。ついで和歌山県有田郡清水町楠本の標高800mの光井山に清水

町の御協力で高冷地牧場として生石農場が開設され、現在の付属農場としての基礎的条件がととのえられました。しかしながら、湯浅農場の土地条件は不良で全くの低位生産地であり、また、生石農場も高冷地の特殊な立地条件のため土地生産力が低く、どちらの農場とも恵まれた条件ではありませんでしたが、その事がかえって今から考えてみれば、かつて故榎本農学部長の言われた、
「盲目蛇におじず」式の思い切った農場開発をなし得た誘因であったかも知れません。

土地生産力と土地利用率の向上をどの様に進めるかが、この時期の主なる仕事であり、そのための手段を求める事がわれわれの責務でありました。当面機械の入手の必要に迫られ、約2ヶ月間米軍との交渉に明け暮れて、32年7月、ようやくブルドーザーを導入することが出来、当時としては全く破天荒な農地の造成を計画し実施したもので、今日の農場の姿はこの時期に位置づけられたものであるとって過言ではありません。そしてこの事業がともかくも進められたのは、故世耕先生と故酒井先生の旺盛なパイオニア精神が大きな支えであったのだと感じずにはいられません。農芸化学研究所時代の所長は現農学部長佐藤庄太郎先生で、付属農場になってからは初代農学部長の故榎本中衛先生が場長を兼ねられておりました。

農場の建設期を通じて感ずることは、「立地条件の良い土地での成功は当たり前、悪い条件の土地に科学技術を応用して成功することが大学人の使命である」との故世耕総長の確固たる意志とその実行力であり、この精神が次の建設期を生み出したのであります。

§ 2. 建 設 期

32年に導入したブルドーザー利用の農地造成法によって、着々と計画は進みテスト段階も終って、いよいよ本格的工事を行なう事となりました。この工事は、34年4月から農地開発機械公団の手によって施工され始めまし

第2表 農場建設期の概要

年月	事項
34. 4	湯浅農場農地造成工事着工
36. 1	農地造成工事完工
36. 6	柑橘園開園
36. 7	畜産部門湯浅農場より生石農場へ移転
39. 7	湯浅農場灌水施設完工
41. 3	湯浅農場に農場本館竣工
42. 5	生石農場の牧野造成工事着工

た。運土量約130,000m³、一丘陵の約 $\frac{1}{3}$ をくずし去って平面の園地を造成しようとするもので、力強いディーゼルエンジンの爆音は昼夜の別なく響きわたり、その間種々の技術的な難問題を打開しつつ、約3ヶ月間を費して工事を完了し、立派な人工農地の素地を造ったのであります。

ところが先にものべた様に土地生産力は極度に低く、これをどうして改良するか、又その手段方法をいかに経済的におこなうかが、次に大切な仕事となりました。

36年6月、柑橘の植付け作業は機械化されて実施されましたが、植栽されたみかん苗木は雑草も育たない土地で極度の生育不良をきたしました。これが解決のために有機物を投入しての土地の改良、機械を利用しての土壌物理状態の改変、灌水施設の整備など、誠に地味で目立たない、それでいて大切な時間と多額の投資とを必要とする作業が続けられました。この時期は毎日が全く苦悩の連続でありました。しかし、時の経過とともに、徐々ながら土地改良の成果がみえ始めましたし、さらにコンポストの投入、トラクターの導入、灌水施設の完備などによる土地生産力の向上に伴って柑橘の生育も順調となり、41年後半から目ざましい樹勢の伸長となって結実を始めたのであります。

さらにこの時期の重要な事は、機械による柑橘園の管理法の基礎的な考えが固まっていたことでもあります。農場開設期から目標とした近代的農場の開発、そのための機械利用が、柑橘園機械化の基調としてうけつがれ、自作機械を作るなど多くの曲折を経て、約80%程度、各作業種を機械化できる様になったわけで、これが今日当農場の一特徴となっているわけでありました。

また、農地造成工事の成果は広く地域社会にみとめられ、農場で測量設計を当業者より依頼された面積は、約350町歩位に達しました。

生石農場は湯浅農場開発のかげとなり、その開発利用はおくれ勝ちでありましたが、39年には乳牛を15頭に増頭するなど、その基礎作りが着々進められ、年来の懸案

であった牧野造成も42年より本格的に着手されまして、現在その工程の約70%程度を完了するに至り、約8町歩程度の牧野と、22頭の乳牛を有する近代牧場に生れ変わりつつあります。もち論、まだ建設期の段階であり、今後各種施設の完備など残された問題が多くありますが、この様に建設期は多忙のうちにも活気に満ち満ちたものでありましてそれだけに思い出の多い時期でもありました。

そして、41年、湯浅農場内には待望久しかった農場本館が鉄筋二階建築として竣工し、実験研究室、講義室、図書室、宿泊施設もできて大学農場として学生教育、試験研究もできる農場になったわけでありました。

§3. 現 状

かくして湯浅農場は柑橘の生育は軌道にのり、圃場の整備も進んで参りまして、総面積約9ha、みかん5,000本以上が結実期に入っております。生石農場は総面積約38haで乳牛牧野の管理も順調に進み搾乳量も飛躍的に増加をみつつあります。一方42年からはCN Corderを始め各種の実験用機械器具が急速に整備され研究体勢にも明るい見通しが立って参りました、地元はもとより全国各地から多くの見学者を迎へ斯界の注目を浴びるに至りました。

斯くして近畿大学農場はその使命の達成に一路邁進しておる次第であります。一層の御支援御協力をお願い致します。

第3表 付属農場の現況

項目	YUASA FARM	OISHI FARM
所在地	和歌山県有田郡湯浅町	和歌山県有田郡清水町
総面積	468,512.77m ²	
面積	87,679.72 (m ²)	380,833.05 (m ²)
柑橘園	77,602.00	
水田	9,375.30	
飼料圃		65,512.87
牧野		89,331.00
林地		175,370.00
その他	702.42	50,619.18
建物	1,7742.27	384.37
本館(実験室)	709.02	96.76
倉庫	692.94	89.26
畜舎		198.35
その他(学生寮・温室)	340.31	
家畜類(乳牛)		22(頭)
機械類	BD-11 Bulldozer, D-4 Backhoe, R-210 Tractor, 其他	